現在、発売中の月刊「文藝春秋」（2011年8月号）の「同級生交歓」欄に、会い学大阪教育大学附属天王寺高校の3人の同級生と登場させてもらった。私たちが、卒業したのは東京オリンピックの翌年の昭和40年。当時の日本は高度成長時代にあり、同級生たちはみな、大きな夢を抱いて旅立った。あれから、40数年が過ぎ、本当に隔世の感がある。

半世紀を経て同級生たちに再会すると、当然、東日本大震災の話になる。現役を引退した同級生も多いが、日本のためにもうひとがんばりしようと、会えば話し合うこの頃である。

文藝春秋「同級生交歓」記事

私ができるのは、現在の医療を少しでもよくすること。そのために、呼ばれればどこへでも行き、「間違いだらけの医者選び」などのテーマで、一般の方々に話を聞いていただいている。「医者に嫌われる医者」が現在が私のポジションだが、そんな医者が1人でもいていいと思っている。

患者本位の治療を

医療ジャーナリスト　富家孝さん

★「病気と闘うな医者と闘え」（光文社）などの著書で知られる医療ジャーナリスト、富家（とみけ）孝さん（64）＝東京都品川区＝がこのほど、高知市で開かれた内外情勢調査会高知支部の講演で来高していた。

内科医の富家さんだが、患者側として病院と司法の場で闘った経験も持つ。2006年、多発性脳梗塞を発症した長男が東京の大学病院でリスクの高い血管検査を受け、右半身にまひが残った。

「本当に必要だった却となったが、患者本位の治療が実際に提供されているかどうか、ジャーナリストとして厳しい視線を注ぐ。

米国の医療事故の発生率を基に考えると、一国内でも約4800人が医療トラブルで亡くなっていると指摘。医療事故を防ぐ手だてとして、手術が決まればほかの医者に意見を聞く▽医者の経歴を調べる▽「この医者なら大丈夫」と思い込まない▽治療実績の資料を出さない病院には気を付ける―などを提案する。

幼少時代の憧れは、絶大な人気を誇った力道山。医療の道を選んだが、36年前から新日本プロレスのコミッショナードクターとしても活躍。「愛、暴力、裏切り…。プロレスのようなヒューマンな世界が大好き」。子どものような無邪気な笑顔を浮かべた。（安岡仁司）

「医者に嫌われる医者を目指す」と話す富家孝さん（高知市九反田）

ぴーぷる

高知市での講演「間違いだらけの医師選び」と、2011年7月13日付け高知新聞夕刊の紹介記事